
ゲームノセカイ

鹿さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームノセカイ

【Nコード】

N6744L

【作者名】

鹿さん

【あらすじ】

自分の体をデータ化し、電腦世界に送るゲーム、通称”バーチャル”。その電腦世界には、戦いがあり、自然があり、魔法も、町も、組織もあった。そして今一人の男が、バーチャル、仮想空間へダイブする。

プロローグ(前書き)

この物語はフィクションです。

プロローグ

「なま君、私と一緒にゲームでもしようか」

本棚、長机、いくつかの椅子。それらプラス人間1名。俺を合わせると2名になるところだろうか。

そんな何もない、殺風景な文芸部の部室に一人居たした設楽先輩は、俺が部室に入ると同時そう言った。

「ゲーム、ですか」

後ろ手にドアを閉め、手に持っていた鞆を机の上に置く。木が軋む音がして、これが年季の入ったポロイ机だということを感じ出した。

「そう、これだ」

よくぞ聞いてくれた、と言わんばかりに先輩は、徐に赤色のエナメルバッグの中から二つのヘルメットの様なものを取り出し机の上に置く。

先輩の鞆がパンパンになっていたのはあれが原因なのだろう。

「なんですか、それ。それかぶって自転車にでも乗るんですか」

あのごつごつした、鼻先まで覆いそうな程のヘルメットをかぶり、盗んだバイクで走り出せばさぞスリリングなゲームになるだろう。

ついでに対向車線で走れば……いや、それはスリリングというよ

りも自殺行為か。

「アホかね君は。これで遊ぶんだよ」

墨を落としたように黒く、風が吹けば綺麗に靡きそんな黒髪を指先で弄りながら先輩は、視線をこちらに向けず話し続けた。

「いくらこういう娯楽に興味のない君でも、このゲーム機ぐらいは知ってるだろう」

机に置かれた、ゴツゴツしたヘルメットのような物と、それより少し薄めで、ヘルメットというよりは普通の帽子にゴーグルがついたような物二つをじっと見る。

そういえば、高校の受験勉強していた頃だったか。

「ああ、なんか何年たっても衰えないであろうって言われてたゲームでしたっけ」

中学の頃、と言っても約一年前だが。受験がすぐ迫っているというのに、俺のクラスではそのゲーム機の話で持ち切りだった。

合格すれば買ってもらえるからって躍起になる奴とか、もう買ってしまい、どつぷりハマって勉強どころではない奴とか、正直前からバカジャーナーノって思っていた。

そんな奴らみたいになりたくなくて、ただこの高校に合格できるよう勉強だけを続けた。

「そう、今やユーザー数3千万を超えするというあのゲーム」

今まで名前は聞いても目にはしてない、そのゲーム。確か名前は。

「バーチャルだ」

そう、それだ。

「んで、どういうゲームでしたっけ」

「本当に何も知らないのか君は。読書もいいが、こつこつので感覚を養うのも中々良いものだぞ」

「ここでやる事って、読書ぐらいしかないじゃないですか」

こつ、文芸部では、読む人がいても書く人はいない。

部員20名、内幽霊部員18名。

毎日のようにここに来ているのは俺、よついち 陽一と設楽 かえで 楓先輩だけだ。絶賛過疎中である。

さらにこの部活棟には、それぞれの顧問の先生すらまったく来ないので、人の気配すらしない時がある。

だからといってゲームを持ち込むのもどうかと思うが。

「じゃあ今日からゲームもしようそうしよう。それで、このバーチャルだが」

椅子に座り、机に肘を付き手の平に顎を乗せる。そんな気だるそ

うに座っている俺を見て何も思わないのか、先輩はただ淡々ととにかくを説明し続けていた。

「と、いうわけだ。わかったか？」

「聞いてませんでした」

「しね」

『いや、先輩の姿に見とれてしまってハッハッハ』

などと言えるのは脳内だけである。睨んでくる先輩に対し、俺はただすいませんと頭を一度下げくらいしかできなかった。これが現実。

.....

「と、言うわけだ。わかったな？」

か？ から、な？ へと変わっている事に少しの戦慄を覚えながらも、今説明された事を頭の中で復唱する。

「まあ要するに、ゲームの中に入り込めると」

「うん、簡単に言うとそうだ。用意された仮想空間に私達が入るよ
うなものだな」

そして、その仮想空間で剣とかを持ってドンパチやったりするら

しい。

協力してダンジョンへ挑むとか少し細かい説明も受けたが、専門用語が多過ぎて俺には上手く理解できなかった。

「その仮想空間に入るための装置が、そのヘルメットということですか」

「ヘルメットって言うな。あと装置じゃなくてゲーム機だ」

変な所にこだわりを持っているのか、先輩は頬を膨らましもう一度俺を睨みつけ、ごつごつした方のヘルメットを一定のリズムで叩きながら再び口を開いた。

「とりあえず、これは私のお古だ。新しいのを買ったから、これは使わなくなっただけ。捨てるのもなんだから、ここに持ってきた」

そしてあわよくば君もバーチャルをプレイしてもらおうと思ったわけだ、と先輩は続けた。

「はあ、まあ暇ですし、読む本もなくなってきたところですし」

「おすし」

「はい？」

「いや、なんでもない」

……設楽先輩はたまによく解らない言葉を言いだす時がある。

学年一の頭脳に、運動部男子顔負けの運動神経。

表では“超”優秀な生徒なのだろうが、裏では楽したいからと文芸部に入り、部費でライトノベルを購入したり、こんな風にゲームを持ちこんだりと、かなり裏表が激しい。

まあ、その裏を知っているのは俺だけなんだけど。

「話がそれたな。とりあえず早速プレイしてもらおう。ちなみに拒否権はない」

どのみち拒否すると面倒になるので拒否するつもりはない。

わかりましたと頷くと、先輩はごつい方のヘルメットを向かいに座っている俺に転がして渡した。

持ってみると、意外と軽く、長時間かぶっていても首が痛くなることはなさそうだ。

「かぶって、耳元にある電源を入れればゲームスタートだ。ちなみに電源を入れる時は目を瞑れ」

「はあ、わかりました。まあどうせ来ないでしょうけど、万が一プレイ中に先生とか来たらどうするんですか？」

そう言うや否、先輩はブレザーの胸ポケットから銀色の鍵を取り出した。ああ、なるほどね。

それを見せると先輩は席を立ち、文芸部のドアの鍵を閉め、何事もなかったかのように再び席に着いた。

「これで安心だろう?」

頷き、ヘルメット、いやバーチャルか。それをかぶると、見た目通り、鼻先まで冷たい液晶が覆った。

手探りで耳元を探ると、スイッチのような感触が右耳の方にある。

「うむ、中々似合っているぞ。何レンジャーがいい?」

「工事現場のおじさんでいいです」

女性としては低く、大人っぽい声で毎回このように茶化してくる。

返し慣れてきたが、一日に何度もこんな無茶ぶりをされるとさすがに疲れた。今日で十回目だ。

「目を瞑らないとログイン時に眩暈が起きて死ぬから気をつける」

「ウエ!?!」

「冗談だ。眩暈が起きて気分が悪くなる程度だな。ちなみに目を瞑るのは最初だけでいい、気付けば開いている」

ゲームプレイで人が死ぬなんて、冗談じゃない。

目を開けていても、無機質な液晶が黒を覗かせてくるだけ。いい加減先輩の冗談に付き合うのも疲れてきたところだ、そろそろバーチャルとやらをプレイさせてもらおう。

「それじゃあ、行きます」

目を瞑り、スイッチを入れたと同時に

「あ」

プツン、と頭の中のかなかが途切れ、意識がどこかに飛ばされるのを感じた

ログイン 1

『情報引き継ぎ確認、初期化完了』

唐突に聞こえてきたノイズ混じりの女性の声により、黒の世界を青色が塗り潰していく。

目を閉じていたのか、安心していたのかはわからない。

目の前に広がる青い空間には、白く綺麗な光の粒子がふわふわと浮いていて、何ともここは幻想的だった。

『キャラクター作成に移行します』

またも声。目の前の空間に現れた宙に浮く二つのパネルを無視し、一度自分の容姿を確認する。

「ほお……」

自分の服は部室にいたときと同じ、よれよれのカッターシャツに黒い学生ズボン。

立っているという感覚もあるので、試しに頬をつねってみると、痛くはないが引っ張られているのはわかるという不思議な感覚だった。悪く言つと気持ち悪いのだが。

こりゃすごい。ゲームにここまで技術を注ぎ込むことも凄い。

『ベタなりアクションだな、凧君』

また一つ、今度は他の灰色なパネルとは違い、緑の半透明のパネルが浮かび上がる。

声にノイズはなく、聞き慣れたこの声はこの緑色のパネルから聞こえてきていた。

「やあ先輩、ポニーテールも似合ってますね」

緑色で四角く、縦横30センチ程のパネルには、髪型をポニーテールにし、黒いマフラーのような物を首に巻き付けている設楽先輩が映っていた。

首元から下は映っておらず、服装などは確認できない。少し残念だ。

『うむ、ありがとう』

「なんで先輩がここに？」

『ワイヤレス通信で同期し、そっちに私の声と姿を送っている。君は説明書を読んでいないから、私が説明書になってやる』

何を言っているのかさっぱりだが、あっちからもこちらは見えているのだろう。

俺はよろしくです、と会釈をし、先輩から先程現れた二つのパネルへと視線を戻す。

片方にはオート、もう片方にはマニュアルと、黒い文字で書かれ

ていた。

『オートを選ぶ』

「説明じゃなくて命令じゃないですか」

といつても結局なにもわからないので、とりあえず従っておく。

オート、と書かれたパネルに触れ指で強く押すと、パネルが点滅し、一瞬で光の粒子へと姿を変え、景色と混ざっていった。

『これでいいですか？』

ノイズ交じりの女性の声。それと同時に、辺りを漂う光の粒子が俺の前に集い始め、人の形を形成した。

頭のとっぺんから足先まで、パラパラと何かが剥がれ落ちていくかのように、形の詳細が彩られていく。

そこに現れたのは一言で言うと、人間だった。いや人形の方が正しいだろうか。

乱雑に切られた赤みのかかった茶髪、目を閉じているため瞳の色はわからない。

身長は俺と同じくらいだろうか、178センチくらいだろう。

そして白いTシャツと短パンを身に付けたこれは、間違いなく俺と同じ容姿だった。

鏡を見ている訳ではないのに、目の前に自分がいるというのはどこか気味が悪く、少しだけ恐怖を感じる。

『オートだと現実世界と同じ姿。それが嫌なら風君もどきの横にあるランダムか、自分ですべて決めるマニュアルを押すと良い』

こんなにもリアルなら、むしろ自分の姿でないと違和感が付きまとうって離れないだろう。

俺は目の前にいる風陽一もどきの横にある、3つのパネルの内の一つ、“OK”というパネルを押した。

『クラスを選択してください』

今度はパネルが光の粒子へと姿を変えず、黒い文字だけが擦れていくように消えていった。

そして、着せ替え人形のように身動き一つしない俺もどきは、消えることなく、変わることもなくそこにいる。

できれば消えてほしい。なんでもいいからちゃんとした服を着ろ。

3つのパネルに再び現れた黒い文字は、右から順にウォーリア、シーフ、マジシャンと書かれている。

これぐらいなら自分でも、と思い、それぞれの特徴らしきものを考え、選ぼうとしたがやはりわからない。

「先輩、これは？」

『お、レアドロップ。相場いくらだこれ』

「聞いてください」

『聞いてくれ、今片手間に敵を薙ぎ倒したらなんと、ドロップ率0、2パーセントの装備品が』

「聞いてください」

パネル越しに嬉しそうにはしゃぐ先輩を見て、溜息をつく。

片手間に敵を薙ぎ倒す、というのはどうということだろうか。

想像してみると、携帯電話を弄りながらどこぞの母がフライパンで、突如現れた黒光りする古代生物、通称Gを叩き潰している映像が脳裏に浮かんだ。

.....

先輩は、俺にその装備品についての詳細を、嬉しそうに語り終えると、ようやく本題に入ってくれた。

『まあ要するにだ、パワーかスピードか、魔法を使って援護攻撃や回復をしたりするかだ』

ちなみに、設楽先輩はウォーリアらしい。

一瞬、先輩の首元から下は、もしかしたら筋肉モリモリだったの

ではないか、と想像した自分を殺したくなつた。

「じゃあ、俺も先輩の同じウォーリアにしようかな」

『できれば私は、君にシーフになつてもらいたかつたが……』

「じゃあシーフでいいです」

『えらくいい加減だな君は』

俺にシーフを選ばせる意図はわからない、だがその意図というものをまったく考えず、俺の指はまっすぐにシーフと書かれているパネルへ向かつて行く。

基本、俺は自分の意思というものはあつても、その中に強い方向性、というものはない。

だから別に寂しそうな声でなくとも、言われればシーフを選んで
いた。

昔、俺の事を、”命令されたがり屋”と名付けた友人がいた。実際その通りだと思つたが、俺は決してMではない。決してだ。

ロゲイン 2

『シーフでよろしいですか？』

3つのパネルが1つ減り、YESかNOかの2つになる。今度は迷うことなくYESを押しした。

YESやらOKやら統一感がないな、こつこつものなのだろうか。

『クラス、シーフ。装備品を支給します』

シーフ、と言った辺りから、辺りを漂っていた光が、俺もどきの体を包み込み、またも剥がれていく。

本当に、着せ替え人形のようにだった。

俺もどきの服は、生まれたばかりのように感じる先程の白だけの服装とは打って変わり、ファンタジーの世界に住む、盗人を思わせる服装になっていた。

色が白と黒しかない半袖の服、腰というよりも、腹の位置にあるベルトは真っ黒で、服の黒と重なり合う部分を見ると黒い十字のようだ。

下は、動きやすいようにか、裾が膝上までの半ズボンで、これも色は白と黒しかない。

そして思った通り、履いているブーツも黒だった。

……不覚にも、少し、かつこいいと思った。俺はナルシストではなかったはずだが。

しかし好奇心には勝てず、気になる背後まで回ってみると、腰には二振りの剣が下げてあった。

『容姿、オート。クラス、シーフ。これでよろしいですか？』

ふと思ったが、名前は決めないのだろうか。

ゲームでは主人公に自分の名前を付けると感情移入しやすいと友人が言っていた。

だが、実際、自分の名前のキャラが死んだときとかはどういう気分なのだろう。

なんて本題に掠りもしないどうでもいい事を考えていると、先程まで静かだった先輩が、察したのか、心を読んだのか、このゲームの名前の仕組みについて説明してくれた。

『人口が何千万となる事を予想してこの設定かどうかは知らんが、このゲームのプレイヤーには名前がない。現実のように、初対面の相手には本名なり自分で考えた名前なりを使って自己紹介しなければならぬんだ。まあ不便はない、名前を偽る理由も特にないし、偽ってもすぐばれるからな』

長々と話し説明し終わると先輩は、あとはOKを押すだけだ、と言っていていきなりパネルごと姿を消した。

プツン、とテレビが消えたように、なんの余韻もなく消えた先輩。

俺は、先輩がここに居ない以上、ここに留まっただけでも仕方がないので、なんの躊躇いもなくOKというパネルを押した。

『キャラクター作成完了。それではバーチャルの世界へ、行ってらっしゃい』

どの言葉にも抑揚がなく、淡々と女性の声、ノイズが流れ続ける。

そしてそのノイズが鳴り終わると同時、周りの青い空間が、俺を中心として白に塗りがえられていく。

一見綺麗に見えるだろうが、俺にとって、急に変わり始める景色は焦りや不安を発生させる原因にはかならない。

ぐらりと、視界が揺れる。思考が、テレビの映りが悪いかのように、物事をはっきりと捉えてくれない。

ゆっくりと消えていく意識、それは暖かく、眠っていくような感覚だった。

「あ

もはや俺の瞳は何を映しているのかもわからない。

視界は砂利で埋め尽くされたかのようで、疲れるから目を閉じてしまおうと思った。

だが、意識が完全に消えうせる直前、何かが見えた。

それは鏡でもなんでもなく、しかしそこに居たのはまぎれもなく自分で。

「……ああ、気持ち悪い」

最後、そこにいた俺もどきが、誕生して以来ずっと閉じていた目を見開いていたのを、俺は見た。

プツン

.....

何かが体に溶けていく。いや、これは体が何かに溶けているのだろうか。

暖かい何かが体を包み込んでいって、小さく、熱い何かが体の中に入っていく。

それを感じる事は出来ても、俺の体の有無は感じる事が出来ない。

頭も胴体も手も足も、全てあるのはわかっている。けれども指先一つ動かない。

目すら開けないのだから、今どこに居るのかすらわからない。

知る必要もないのだが、意識があるのに動けない、というのは気持ち悪くて仕方がなかった。

包み込まれ、埋め込まれ、それを何度繰り返しただろうか、いつ

しかしその感覚は消えていた。

そして、自分の意志ではないが、指先がピクン、と動く。それをきっかけに、俺は体の自由を取り戻した。

地に足が付き、足腰で体を支え、風を感じながらも頭を上げる

「 ああ、こころが」

そして目を開いた瞬間、世界が広がった。

どこまでも広がる、鮮やかな緑、草原。

牛か何かいるんじゃないかと周りを見回したが、そんなのはいるはずもなく、ただ青い空と緑の草原が、景色の向こうに一本の線を作っているだけだった。

風が草を靡かせる音、思わず寝っ転がりたくなる。

「 バーチャルか」

ああ、リアル過ぎるな。けど、結構良いかもしれない。

GAME START 1

「……………涼しいな」

風もある、大地もある、空もある、そして太陽もあり、燦々と俺を照らし続けている。

ここはゲームの中なのにも拘らず、俺はそれらを感じる事が出来た。

現実と違ふところって、どこだろう。

そんなことを考えるくらい、リアルだった。

手の平を見ると、いつの間にか茶色の革の手袋を付けていることに気づく。

視線を手の平から自分の体へ変えると、俺は、あの時の俺もどきと同じ服を着ている事がわかった。

「同化、ってことなのかな」

当てはまりそうな単語をぼそりと呟く。

それにしても、周りを見回しても同じ景色が続いていると、どこに行けばいいのかわからない。

先輩を呼ぼうとしても、パネルももうないし、こちらから話しかける方法もわからない。

正に鉄壁のスカートである。

「まあ普通今からチュートリアルに行くわけだが、そんなのは必要ないな。私が教えてやる」

そう言っつて、突然先輩は立ちつくしている俺の手を握った。

分厚い手袋に阻まれ、体温などは感じられない、残念。

「ま、色々と過程をすつ飛ばして、今から街へ向かう。ここじゃなんの面白みもないからな、私の仲間たちがいるところへ向かおう」

先輩は、どこか急いでいるようだった。今の言葉も早口で、俺の手を今すぐにも思いつきり引っ張って連れ出しそうな様子だ。

けれど顔に焦りは見えず、何故か嬉しさが滲み出ている。何とゆうか、とても幸せそうな顔だった。

「それじゃあ行くから、手を繋ごう」

「もう繋いでますよ」

繋いでいるというよりも、掴んでいるだが。

そう言っつと先輩はそうだったな、と頷いて、空いている手を空にかざした。

つられて俺も空を見る。青い空に浮かぶ雲は、ふわふわしてて、ゆっくりと動き続けている。

それは眠っているようにも感じて、何とも気持ちよさそうな感じだった。

「着いたぞ」

そして、視線を空から前の景色へと戻す。

驚いた。あの緑の草原はどこへいったのやら。

目の前の景色には様々な奇抜な格好をした、多くの人達がいた。

城下町を思わせるような景色。地面の感触もいつの間にか硬く変わっていて、周りからは人々の活気ある声が聞こえ、色んな言葉が耳に入ってくる。

「うわぁ……凄いですね。何したんですか？」

「ただのMAP移動だよ。慣れれば君もできるようになる、というか今度教えてやる」

どうやらこのゲームは説明書がなければなににもわからないようだ。

こっちだ、といって歩きだす先輩に付いて、手を引かれながらも興味が向く方をちらちらと見ながら歩いていく。

GAME START 2

甲冑を身につけ、長く、叩き潰すような剣を持った大男などが金属音を鳴らしながら向かうところは、決まって赤い看板が立てられた剣や鎧が店先に並んでいる店だ。

先程通り過ぎたその店には、多くのプレイヤー達が入りししていた。

それらの半分以上はウォーリアなのだろう。

そしてシーフもまたしかり。緑の看板の店を、身軽で、手ごろそうな細い剣を下げたプレイヤー達が入りする。

とんがり帽子をかぶった如何にも魔法使いな人達は、青い看板を立てかけてある怪しげな店に入っていく。

専門店にはその専門の仕事を持っている人間しか入らないようだ。

「広いな……」

この街はどこに行っても賑やかで、どこに行っても退屈するなんて事はないだろう。

道端で雑談している何人かの話の内容を立ち聞きしているだけでもかなりの時間を潰せそうだ。

「ここだ」

急に、手を引いて道を進み続けていた先輩が止まる。繋いでいた手を離し、俺は先輩の視線の先を見た。

「ここが、私達のギルドだ」

そう言うと先輩は、俺の返事を聞かずに階段を下りていく。もちろん俺はそれに着いていった。

視線の先、階段の先には、赤く、そして金色で綺麗に裝飾された、人が横に4人並んで入れそうな程の扉が見える。

階段を下りる度に深くなる闇は瞬間的なもので、その扉の色はこの闇を照らすかの如く、凄まじい存在感があった。

扉の前まで来ると、上で聞こえていたさまざまな“声”は、遠い“音”となっていて、どこか寂しくなる。

先輩が扉に手をかざすと、上に一枚の薄い半透明のパネルと、先輩の手にキーボードのようなものがでてきた。

カタカタと小気味よく音を立て、先輩がなにかを入力すると同時上のパネルでなにか文字が表示されていく。

「歓迎するぞ、ていうかしてくれと思う」

「微妙に不安になるようなこと言わないでください」

たん、とピリオドを打つかのように、先輩がエンターキーを押した。

パネルの文字を見る。片方は普通の文字、もう片方はパスワードだろうか、全てが“*”で表示されていた。

先輩が振り返り、不敵な笑みを浮かべながら口を開く。

そして文字の方にはこう書かれていた

「ギルド名、悠久旅団だ」

有給旅団と。

……流石に有給はないだろう。

「誤字発見」

「……え？ うわつ。台無しじゃないか」

俺は、顔を赤らめ、急いで文字を直している先輩を見て、どこか得した気分になった。うん、可愛い。

……

「さ、こんどこそは大丈夫だ」

そう言って、先輩はもう一度エンターキーを押す。

するとパネルとキーボードが消え、赤く大きな扉が何の音もなく、

ゆっくりと開いていく。

……その開いていくのと同じ、自分の意識がどこか沈んでいくような感じがした。

扉の向こうは白い光で包まれている。だが、それに反して俺の意識はどこか、黒いところに落ちていく。

いや、どこかで止まっているのだろうか、ぼーっとしている、という感覚に近いかもしれない。

そんな中、

「ようこそ、悠久旅団へ」

もう一度聞こえた、先輩の声。それにより意識が覚醒する。

再び広がる視界に映る空間は、先ほどとは違う場所。

目の前には赤い絨毯に、部屋の隅には人が数人はいりそうな大きな木箱、そして部屋の中心には長い木製のテーブル、椅子があり、どこかデジャヴを感じる光景だ。

「エリア移動するときは、意識が少し変な感じになるだろ？ すぐ慣れる。いや慣れる」

そうやって先輩は部屋の中心に向かって歩き出す。この部屋、高さはかなりあるが、そこまで広くはない。

10人程入って、賑やかになるくらいだろうか。

「今は誰もいないのかな。この時間なら鹿路ろくろと瀬楽せつがいるはずだが」

「鹿路さんと、瀬楽さん、ですか。男の人と女の人ですか？」

「そつだ。よくわかったな、名前だけで」

ただの勘だ。

ええ、まあと言葉を濁しつつ次に発するべき言葉を探す。

「その二人、どんな人なんですか」

「筋肉ダルマと合法ロリだ」

とんでもない答えが返ってきた。必死になって探した質問に、すごい答えが返ってきた。

「ちなみに略して金玉きんたまとゴリだ」

続けて最低の言葉も返ってきた。

酷い、酷過ぎる、金玉、きんたま、きんま、その言葉が、“先輩の口から出た”その言葉が、俺の頭の中でエコーとともに何度も繰り返されている。ゴリはどうでもいい。

「女の子が金玉きんたまなんていつちゃいけませんっ！」

大声で怒鳴る俺に対し、先輩は白い歯を見せアハハと笑うだけだった。……まったくこの人は。

二人について聞く必要はあったのだろうか、聞いてなんだか後悔した。

なにかを期待していたってわけではないんだけど。

「まあとりあえず座って待とうか」

そういつて先輩は、部屋の真ん中に寂しく置かれている机、椅子を慰めるかのようにゆっくりと撫で、座ると、俺を向かいの席へ座るよう促した。

.....

座り、待つ事数分間。俺は先輩のいつもの冗談　冗談であつてほしい　を聞き流しながら、入口の赤い扉を見つめていた。

鹿路、瀬楽、二人は一体どんな人物なのか。

それらについて今持っている情報はたった二つ、筋肉がすごい事とロリ、以上。こんなの情報じゃない。

溜息をつくと先輩の反応が怖いので、ゆっくりと息を全て吐き出し、ゆっくりと限界まで息を吸った。

ゲームの中であろうと、呼吸は大事である。ゲームの中で呼吸をする、という事自体がどこかおかしいのだが。

そしてその一連を終えると同時、扉に変化が訪れた。赤い扉がゆっくりと開き始めたのだ。

それと同時に、先輩が『来たか』と言う。鹿路と瀬楽、その二人が来たのだろつかと目を凝らす。

扉が開き切り、二つの足音が聞こえた。

「先客がいるみたいだな」

「瀬楽、ただいまログインいたしましたっ」

低く、落ちついた声と、高く、無邪気に遊ぶ子供のような声。

扉の向こうの白い光から現れた二人は、皮肉にもあの役に立たないと思っていた情報通りだった。

鹿路と思われる人物を見てまず、でかい、そう思った。

短い黒髪、そして黒いタンクトップの上から見てもわかる胸筋、腹筋は見事なもので、腕も太く、筋肉が鎧を作っているようにも感じる。

そして迷彩色のズボンと、どこかの軍人かなにかと一瞬思った。

そして瀬楽は、鹿路と並んで歩いている所為でもあるのだろうか、小さい。

小さすぎる。合法ということは一休何歳だろうかこの子は。

首までのピンクの髪は所々はねていて、そのはねた髪の毛で耳のような形を作っているのも見受けられた。

服はチャイナスーツ、とは少し違うが、どこか中華的な雰囲気醸し出している。

「やあやあ二人とも、聞いてくれ」

先輩が席を立つ。俺も習って席を立つと、先輩が俺の少し前に移動し、両手を腰にあてこう言った。

「君達のあだ名が決まった。鹿路、お前は金玉、瀬楽はゴリな」

「今言うべきはそれじゃないでしょう」

「とまあこのように突っ込んでくれる風君だ、よろしくやってくれ」

GAME START 3

「はじめまして、凧です」

はい、自己紹介完了。

9文字で終わった自己紹介を聞き、すぐ横にいる先輩がはあ、と溜息を吐き腕を組んで口を開く。

「つまらない自己紹介だな。もっとこう、夜露死苦とかさ」

「同じじゃないですか」

大きな体を俺の方に向けた鹿路は、足を一步大きく踏み出し、俺に近づいてくる。一步踏み出す、それだけで岩が動いたかのような、そんな迫力がある。気が弱い人が見たら怖がるのではないだろうか。

「君に」

さあ一步目、歩幅が広いのか、俺と鹿路の間隔は一気に短くなる。でかい体が、更にでかくなったように感じた。

「聞きたいことが」

二歩目、話すには丁度いい間隔。だが、鹿路は更にもう一步踏み出そうとする。

筋肉すげえ、そしてでけえ、そう思った。

「一つある」

3歩目、少し顔を突き出せばぶつかってしまいそうなくらいまでの間隔となる。

顔が近い、こっちくんな、さつさと次の言葉を話せ。と内心で叫び、口ではな、なんですか？ とまあなんともビビリな発言をした。

「……この肉体を見て、どう思う？」

「は？」

真剣な顔でそう言った鹿路を見て、俺は仰け反りながらも疑問符を表情に浮かべた。

そんなことを聞くためにこんなに近づいたのか。ていうか、なんだこの質問。この人自分の筋肉になにか想うことがあるのだろうか。

だが聞かれたのだから、答えなければならぬ。これは

問いだ、問うた人間がいるのなら、答えを表す何かがいなくてはならない。

一歩下がって、問いに答える。

「筋肉すごいですね」

「それほどでもない」

表情には小さな驚きと大きな嬉しさが見られた。聞きたいことつてこれかよ。なんだこの質問。というか俺に聞くなよ。これは内心実際は苦笑いし若干引いている。

「あの……鹿路さん？」

「うわ、リーダーがさんづけされてるよっ」

きもーい、と後ろで瀬良が言った。聞こえてないのか、鹿路はまだ俺に笑顔を向けている。それはもうきらきらと。

至近距離のせいかな、幸せいっぱい、嫌なことなど一つもないといった笑顔はどこか気持ち悪い。ああ、きもーい。

「ああ、悪い悪い。それで俺達のギルドに入りたいんだってな」

その問いに対し、俺ではなく、先輩が一步鹿路に近づき代わりに答えた。

「ああそつだ。なかなかいいやつだぞ。今まで私の命令に背いたこととはない」

「命令って自覚してたんですね」

俺が話したのはそれだけで、先輩と鹿路でなにやらギルドについての話が始まった。

ただし一対一だ。会話に俺は入っていない。二人は話し始めたと同時に、視界から俺が消えているのだろう。

新規をほつたらかshにしているのかと思ったが、自分から『俺のことについて話してください』なんて言えないので、ゆつくりと静観することにした。

すると瀬良がさっきまで俺が座っていた椅子に座り、俺を小突いた後、『私のことは瀬良でいいよ』と小声で言ってくれた。

わかった、とだけ頷くと、瀬良は笑顔を向け、席を立ち部屋の隅にある木箱の方へと向かっていった。可愛い笑顔だ。

瀬良が向かっていく後ろ姿を見届け、椅子に座りなおした瞬間、鹿路に名前 名乗った通り、凧と を呼ばれ急いで再び席を立つ。

先輩は話し終えたのか、赤い扉へ歩いて行く。どこか焦っているようだが、どこへ行くのだろう。聞こうとしたが、鹿路が先に口を開いたのでそっuchiの方に集中することにした。

「じゃあ早速入隊試験。といきたいが、凧は今無線で接続してる？ それだとアリーナに行けないからまた今度だな」

入た、なんだって？

「……鹿路さん。入隊試験なんてあるんですか？」

数ある疑問、無線やらアリーナやら意味がわからないのもあったがそれはまだいい。

入隊試験、それぐらいはわかる、けどそんなのがあるなんて聞いていなかった。それと同時に、俺は先輩がなぜ焦っていたのかを悟った。もう一度赤い扉の方、鹿路の後ろを確認すると、やはり先輩の姿はなかった。

畜生先輩め、逃げやがったな。

どこに行くのか、と呼びとめれば……いや、それでもはぐらかさず
れて結局こうなっていたか。

「なんだ、設楽に聞いてなかったか？ あと鹿路でいい。さんづけなんて、瀬良達に聞かれたらきもいとか言われそうだから」

もつぱうちり言われてます。あと言いました（内心で）

しかし参った、入隊試験があるとは、……しかし入隊試験の内容ってなんだろう？

「わかりました、とりあえず入隊試験受けます。でも試験って、なにすればいいんですか？」

「簡単だよ。アリーナで俺と戦って勝てばいい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6744/>

ゲームノセカイ

2010年10月9日00時05分発行